

発刊にいたるまで

二〇二〇年の秋に、片山隆男先生(当時、副学長)から本研究叢書執筆の打診をいただいた。その際に前田啓一先生(当時、比較地域研究所所長)も同じご意見であったとお聞きした。大変感激した私は、その場でお引き受けした。

後日、前田先生にお見せする構成案を作成するため、旧稿の一覧を眺めつつ、あれこれ考えた。テーマの候補として、一つは貨幣史、もう一つは清酒業史があった。ただ貨幣史はまだ発展途上であったため、後者で練った案でご承諾いただいた。

草稿は二〇二一年秋に何とか提出することができた。その後、査読者の方の目を通していただいた。査読コメントに章タイトルが分かりづらいとの指摘があった。改めて読んでみると、確かに全体の統一感へのこだわりが余分だった。そこで、読み易さを優先に切り替えて、全面的に改訂した。

なお、旧稿のうちには一九九〇年代初頭に遡るものもあった。そのため、「フロッピーディスク」に保存しっぱなしのものや、今では余り使われない国産の文書作成ソフトによるものなどがあった。そのため、これらの再利用にはかなりの労力を要した。

御茶の水書房社に入稿した後は、同社の小塚章夫氏に大変お世話になった。校正を重ねるう

自著紹介

大阪商業大学比較地域研究所研究叢書第21巻
清酒業の社会経済史
—19/20世紀の眺望—

(御茶の水書房、二〇二二年三月)

加藤慶一郎

ちに、同氏のご提案で表紙に画像を使うことになり、さっそく西宮市のデジタルアーカイブから「新酒番船入津繁栄図」と「新撰銘酒寿語録」を選んだ。それぞれカバーと本扉に掲載された。以下では、全一〇章からなる本書から、柱になりそうな内容を簡単に紹介したい。

酒造メーカーは老舗なのか(第二章)

一九八〇年代ごろからの地酒ブームの産物ではないかと思われるが、大部な地酒のガイドブックがあった。パラパラめくっていると、ほ

である。

酒造業は地方工業の横綱だった(第五章)

明治末の統計資料に、府県ごとに工産物の生産高をまとめたものがあった。その調査の意図は、貿易輸出振興にあったと推測される。ざっと見ると、清酒が第一位である府県が目についた。もちろん、それまでも清酒は地方の有力産業であることの影響はあったが、この資料を整理すればより正確に状況が分かるだろうと考えた。

実際に統計を整理してみると、東京や大阪などごく限られた例外はあったが、予想通り清酒(もしくは酒)は全国各地で判を押したように最大の工業製品であることを数値で示すことができた。

酒造蔵のレンタルがあった(第六章、第七章)

大学院生の頃に、灘の蔵元の史料を閲覧する機会をいただいた。それは未整理のままでもブリキの衣装函に取められていた文書群であった。その中に、明治末から大正期にかけての酒蔵の貸し出し帳簿があった。借り手を見ると、なんと愛知県の酒造家も名を連ねていた。そんなことがあるのかと調査をすすめると、多数の類似例が確認できた。というよりも、これらの外来酒造家は灘において一つの勢力をなしていた節さえあった。決して、特異な事例ではなかったのである。

とんどの蔵元が創業年を記していた。地域に拘らず、創業年が幕末から維新期に集中している印象をもった。

そこで一念発起して、千以上の蔵元の創業年を整理してみた。すると現存の蔵元の約四分の一が幕末・維新期の創業であった。これは、この時期に爆発的な創業があった証左である。こちらの期待が過剰だったかもしれないが、江戸期からの生粋の酒造家はさほど多くないの

こうして近畿を中心として、地方から灘へ酒造家がかんりの頻度で進出していた状況を知ることができた。それは、企業家精神に溢れた地方酒造家が、灘酒の製法やブランド力を目当てにした行動であったと目された。江戸時代にも

同様の現象はあったが、近代では飛躍的に増えたのであった。彼らはいずれも個性的な人物ばかりであり、その人物像も紹介した。

伝統へ回帰した酒造りのイメージ(第九章)

時期ははっきりしないが、たぶん地酒ブームの影響かと思うが、大手の清酒メーカーが伝統産業的な側面を押し出すマーケティング戦略を展開し始めていたように感じていた。「灘の地酒」といった表現などもあった。

他方で、酒造りをテーマにした近年の小説やマンガを読むと、主人公は「日本男児」ではなく、多くが日本人女性もしくは外国人であった。これは清酒界にただよう閉塞感の反映であるように感じた。

意図的か否かもかく、イメージは実態とは別に、さまざまな要因によって移ろっているのだらうと予想した。この点を確認するため、清酒業のイメージを対象にしようと考えた。

実際に、戦後における観光ガイドブックや地誌類を追うと、高度経済成長期においては、清酒業が真正正銘の近代工業として表現されていた。その特徴は、有望な輸出産業であること、工場である酒蔵が鉄筋コンクリート造りであること、ベルトコンベアが使用されていることなどである。

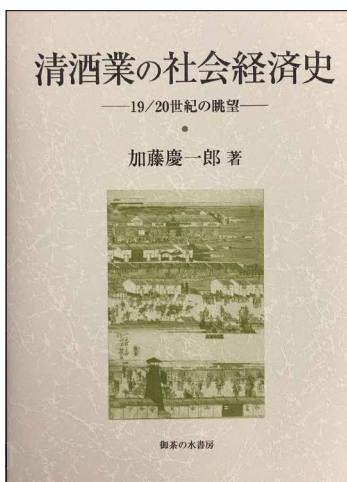
しかし現在は、こうした側面は後景に退き、木造の酒蔵に象徴される、江戸以来の伝統イメージへ回帰し、強調されている。これは清酒業が近代産業に挫折したことを示唆すると理解した次第である。

電算機システム自主開発の聞き書き(第一〇章)

兵庫県伊丹市の老舗清酒メーカー(小西酒造

株式会社)のOBの方々から、高度経済成長期の華々しいエピソードを期待しつつ聞き取りを行った。話題は、マーケティング戦略やトラック輸送の黎明から、社会人野球などのほか、事務の機械化におよんだ。本書では、特にコンピュータの導入に的を絞り、聞き書きを再編集して収録した。

同社では、一九七〇年代に大型コンピュータ



を導入した。今では考え難いが、システムは社内で作ったのである。当時の小西酒造の社員数はせいぜい一〇〇〇〇人程度であった。それでも、コンピュータメーカーの支援を受けつつも、社員の方々が自力でシステムを作り上げたのである。

しかし、こうした機械化に対して、社内では老舗ならではの抵抗があった。なかには「コンピュータで卵焼きができるんか?」といった反応もあったそうである。こうした環境の下、何とかシステムの稼働に漕ぎ着けたが、反発に妥協を余儀なくされたシステムの痕跡が、現在で

も業務合理化の足かせとなっているという。本書の特徴について

以下の五点を指摘しておきたい。

- ①「創業」という現象に着目して、前近代から近代までの通時的観察により、長期的展望を得たこと。
- ②二〇世紀初頭における、全国的観察を行い、酒造業の地方産業としての位置付けを明らかにしたこと。
- ③その中で、全国最大の産地である灘五郷が、地方酒造家に発揮した求心力を解明したこと。

- ④酒造業のイメージの変容について、一般向けの刊行物を検討し、実態との乖離を剔出したこと。
- ⑤聞き書きを通じて、清酒メーカーの電算化に関する成果と課題を明らかにしたこと。

これからの課題

経済的には、清酒業は酒米と飯米の競合の上存立しており、そこに公権力の社会政策的介入が必要であった。また、畿内の産地と関東の消費地は、物流と金融の高度な技術が結んだ。酒税の確保の観点からなされた、清酒業への保護政策の弊害も検討の余地がある。

社会的には、各地の酒造家は地域社会を支える名望家であった。飲酒をめぐる倫理の問題(節酒・禁酒・飲酒習慣)は現在も議論的であった。また、酒席を介した人間関係形成のあり方も、酒の生産・流通・消費と無関係ではないだろう。

(本学総合経営学部教授)